

スロー社会学の試み(1)

— 問題意識 —

森 真 一

Doing Slow Sociology

— its purpose and method —

Shinichi MORI

スロー社会学の試み(1)

— 問題意識 —

森 真 一

Doing Slow Sociology
— its purpose and method —

Shinichi MORI

要 約

本稿はスロー社会学の試みについて、その問題意識を説明していく。T.デノーラが提唱するスロー社会学の継承・発展を本稿は目指すが、デノーラとはやや異なり、社会学的思考をスロー・シンキングと捉える方向へとスロー社会学を展開していきたい。そして、研究を着手する時点で社会学研究者がおこなっているスロー・シンキングをみせることの意義について論じていく。

キーワード：スロー社会学、複雑化、スロー・シンキング、スロー・リーディング

1. スロー社会学という姿勢

私が初めて「スロー社会学 (Slow Sociology)」ということばを知ったのは、T.デノーラの *Making Sense of Reality* (DeNora, 2014) においてである。しばらく本書の主張を紹介しておく。

*After Adorno*等の音楽社会学の業績で知られるデノーラは本書において、選択知覚に関する社会心理学的実験の成果や、L.ヴィトゲンシュタインの「must」概念、Th.W.アドルノの否定弁証法を理論的基礎とし、そしてエスノメソドロジーや科学社会学と共通する関心のもと、人びとがどのような方法でリアリティを構築し理解しているのかを分析・説明しようとする。そのような分析・説明に際して、人びとがものごとに向ける関心には微妙な差異があるということ (nuanced attention) を強調する視点、および人びとのリアリティがどのようなものなのかに関して“こうであるはずだ”という推測や思いこみを避ける視点、これらの視点をデノーラは重視する。リアリティに関する性急な思いこみ (hasty presumption) を抑制しようとするこれらの視点が、スロー社会学の基礎となる。

たとえば、「承諾／拒否」「良い／悪い」「きれい／汚い」「健康／病」「快／不快」といった二元論もしくは二項対立をデノーラは問題化する。こういった二元論はものごとを整序するには役立つが、微妙な差異を単純化しすぎてしまうため経験的記述には役立たない。じっさいに起きているさまざまな事例の単独的性格 (singular character) を捉え損なうからである。

このようにデノーラはものごとの単独性や複雑性に注意を向けるが、彼女にとってさらに重要なのは、どのようにして人びとがこのような現実の複雑さあるいは乱雑さ (mess) をきれいに整序し、二元論的にものごとを認識し、そのような認識の方によりリアリティを感じるようになるのか、という問題である。しかし、この問いに答えるには、まず現実がどれぐらい乱雑としているかを記述する必要がある。そのためには細かなことがらにも注意を向けなければならない。だからスロー社会学とは「ものごとの特殊性 (particularities) に着目する、反-包括的な (anti-generic) 探求様式だ」(DeNora, 2014 : 3-4) という。

スローという姿勢 (approach) は、より多くのことがらを考慮に入れ、可能性や潜在的なものを認識しようとする姿勢であり、それゆえに混乱や不確実性のリスクを冒す方法でもある。リアリティに関する常識的理解、すなわち、“リアリティとは人びとの「外部 (out there)」にあって、人びとの行為や知覚から独立して存在し、人びとに先立って存在する、一義的で単一のものだ”という理解から距離をとる、ともいう (*ibid.* 12)。

こういったデノーラの姿勢には、E.デュルケムが提起して以来受け継がれている「ものとしての社会的事実」の概念を問い直すという問題意識がある。先述のようにデノーラにはエスノメソドロジーや科学社会学に共通する問題関心があるので、このような問い直しも不思議ではないだろう。「リアリティは“動かしがたい (hard and fast)” もののように思われているが、じっさい

には複雑で可変的でありまた不確実でもある。それがスロー社会学の鍵となる第一の教訓である」(*ibid.* 23)。

そもそも「もの」のようなリアリティはどのようにして構築され変容していくのか、また変容の可能性をもつのか。この問いに取り組むために、デノーラはスロー社会学という姿勢を提唱しているわけである。「そのような状況（人びとがリアリティの意味を理解する状況：引用者注）を精査することは文化社会学とデュルケムのアフォリズム（社会的事実をものとしてあつかうこと）とを再度詳細に記述する（re-specify）ことである。つまり、その『もの性（thing-ness）』がどこからやってきたのかという問いを精査することである」(*ibid.* 149)。

以上の簡潔な紹介からもうかがえるようにデノーラは、リアリティの構築と変容に関わる人びとの営みの複雑さや多様性、単独性などを捉えようとしてスロー社会学を提唱しているとまとめることができるだろう。

これまでも社会学は単純化しがちな常識的理解や認識のあり方を問題化し、複雑さ・多様性・単独性・不確実性・可変性などを認識しようとしてきたのであるから、彼女の問いかけは特別目新しいわけではない。けれどもいわば“頭ではわかっている、ついでにやってみよう”というようなことは往々にしてある。それを社会学者がいつも免れられるわけでもない。むしろ免れるのは不可能なのではないか。その不可能性を自覚したうえで、単純化や思いこみ、決めつけの罫をすこしでも減らすための姿勢としてスロー社会学を提唱する。そこにデノーラの真意があると私は解釈している。

このような解釈を前提にすると、明確には提唱してはいないけれども、実質的にはスロー社会学を提唱している社会学者たちがみえてくる。

2. B.ライールの社会学

フランスの社会学者B.ライールもスロー社会学の姿勢を表している。それはハビトゥス概念に対するライールの批判的考察にうかがえる。

社会学では一時ハビトゥスという概念が流行した。それぞれの社会的な世界には慣習がある。長期にわたってその世界で生活していると、その慣習がその世界で生きる人びとの身体に刻みこまれる。身体に刻みこまれた慣習的なものがハビトゥスであり、それが身体に刻みこまれることが身体化と呼ばれる。

ハビトゥスが身体化した人は意識しなくてもハビトゥスにしたがって適切な行為を実践できる。スポーツの世界では、同じ動作を何度も何度もくり返し練習することで、試合に勝つための動作（＝ハビトゥス）を身体にたたきこむ（＝身体化）。試合では瞬間ごとに状況が変わる。絶えず変化する状況や相手の動作に対して適切に反応できる動作を一瞬で無意識に判断し実践することが選手には必要だからだ。ボクシングのような格闘技においてはとりわけ一瞬の判断、瞬間

的な動作が重要視され、優秀なボクサーはハビトゥスも高度に身体化されていると考えられる。一々ことばで考えたりしては、スムーズに身体を動かすこともできず、状況の変化に対応などできない。「自然に身体が適切に反応する」ようになるまでくり返しトレーニングする。ハビトゥスや身体化を重視する社会学者は、日常の慣習的行為についても、これら二つの概念を使って理解・解釈する。ことばや意識的思考ではなく、無意識化・身体化したものにしがたって人びとはさまざまな日常的行為を「自然に」スムーズにこなしているというわけである。

このような説明に異を唱えたのがライールである。ボクシングのように、まるでことばをもたない野獣同士が殴り合っているようなスポーツであっても、じつはボクサーの動作を方向づけているのは身体化されたものだけではなく、ことばの使用も重要な効果をおよぼしている。そのことをフィールドワークを通じて明らかにしようとする。

「問題はどこに枠組みをおき、どこで切り取るかにある。というのも、いつも、沈黙の内に活動がなされるときに枠組みをおいて、ことばのない、いかなる種類の言語的介入もなされないような場面に照準を合わせてしまっているのかもしれないのである。ほんの少しだけ枠組みを広げて、もう少し長い時間にわたって場面を設定すれば、たとえその場では話をしていなくても……時にはその前や後に話していることが確認されるはずなのである」(Lahire, 1998=2013: 286、傍点引用者)。

ハビトゥスや身体化の影響範囲を過大視する理論家は視野が狭くなっており、単純化に陥っている。視野をもう少し広げてみれば、身体化以外の要因もいろいろみえてくる、とライールは主張しているわけである。単純化を避けて世界の複雑さや多様性をも考慮に入れようとするこの主張は、スロー社会学の姿勢を肯定するものだろう。たとえば高速道路を時速100キロで走る車に乗っていると風景がつつぎつつぎと変わっていく。はっきりとみえるものは少ない。一方、ゆっくり歩いていれば、さまざまなものをはっきりみることができる。ふだん見落とししがちなものができるだけ見落とさず、違和感を覚えるけれど一々取りあげるのがめんどうなものもできるだけちゃんと取りあげて考えてみるのがスロー社会学なのだから、「ほんの少しだけ枠組みを広げて、もう少し長い時間にわたって場面を設定」しようとするライールの姿勢もスロー社会学的だといえよう。

ハビトゥス概念も当初は微妙な部分を見落とすことなく考慮に入れて、階級というリアリティがどのように再生産されるのかを説明するために考案された概念であっただろう。しかしそれが一定の説明力をもつものとして社会学の世界で受容されると、いつのまにかハビトゥスで説明できそうな部分にばかり着目し、説明できたような、わかったような気になってしまう。そして社会学者は安心する。そこに揺さぶりをかけようとするのがライールの意図でもあるように思う。そう解釈できるとすれば、ここにもスロー社会学の姿勢がうかがえるだろう。

3. H.ベッカーの「社会学の技法」

ラベリング論で有名なH.ベッカーには、社会科学の論文の書き方や社会学的研究の技法に関する著作がいくつかある。そのひとつ（Becker, 1998=2012）をみると、彼がいかにして社会的世界や人びとの多様性を捉え、われわれの認識枠組みをどのようにして複雑化するかにつよい関心をもっていることがうかがえる。

技法（tricks）が実行しようとするのは、ものごとをまったく異なる角度からみる方法を提示することであり、そうすることで、調査すべき新しい問題が創造でき、事例の比較を可能にする新たな可能性や新しいカテゴリーの発明を可能にする新たな可能性を創造できるようになる。……それは楽しいかもしれないが、もし自分の頭をまったく使わないですむような定型的な（routine）やり方でものごとをなしてきたのなら、とてもたいへんな作業となるだろう。……本書のどの節でも、慣習（convention）という主題を……社会学的思想の主要な敵とみなしている。……われわれは自分たちの思考がおよぶ範囲を拡張する方法、自分たちが過去に考え問うことができたもの以外のものをもみる方法、世界で現在も進行中のものの多様性をあつかうことができるような思考力を増進させる方法を必要としている。私が述べる多くの技法はこうした試み（enterprise）に貢献しようとしている（*ibid.* 7=8-9）。

たとえば、ベッカーは「社会を機械とみなす技法」や「社会を有機体とみなす技法」を提案する。これらはかつて隆盛したときのように機械的世界観をもつことでもなければ、決定論に与することでもなければ、社会有機体説に逆戻りすることでもない。

時計でも車でも冷蔵庫でもいいが、なにかひとつでも部品が欠けていれば機械はうまく作動しない。生命活動も同様で、細胞や器官などが機能しないと、生きていくことができない。では、どのような条件があったりなかったりすると、機械が作動したりしなかったりするの、生命は活動したり活動を停止したりするのか、を考え調べ想像する必要がある。行為や現象を理解し説明するにも、こうした条件をできるだけ見落とすことなく想像してみることが必要だとベッカーは主張しているのである。

社会科学的思考の基本的形式に本質的になにか間違ったところがあるわけではない。ただ、社会学者がそうした基本的形式を用いるべきときにじっさいには用いていないだけだ。最悪の問題に陥り、大きな過ちを犯すのは、どのようにものごとをなすべきかを忘れているときである。つまり、なにか政治的な肩入れをしていたり感情的なこだわりがあることで、問題を狭く捉えることになったり、もし注意していれば自分たちの基本的理論によって考慮に入れるよう仕向けられていたはずのできごと全範囲に注意が向けられなくなるときなのだ。社会を大きな

機械とみなすという技法は、こうした過ちの可能性を考慮に入れて設計されている。……社会が機械であるかのように想像することで、必要なことを見落とさなくてすむようになる。われわれの感情や傾向、関心によって忘却されたり無視されたりするであろうものをじゅうぶんに組み入れることができるからだ。必要なものすべてがそろわないかぎり機械は作動しない (*ibid.* 35-40=45-51)。

社会を有機体として捉えることは、それ自体としては分析的な技法ではなく、関心があるものに関連するすべてのことがらに注意を向けよという一般的な警告にすぎない (*ibid.* 43=55)。

フィールドワークや参与観察によって調査研究をしてきたベッカーは、調査のときの姿勢についてつぎのように述べている。「物語に関わるすべての人びとのこと、できごとのこと、環境のことを私が知っているわけではないということははっきりしていた。聞き取りの相手からいろいろ教えてもらっているあいだ、これまで情報収集してきたものにさらに新たな情報を追加しつづけ、私の理解や分析をより複雑なものにしようと自分では心がけてきた。人びとにできるだけ自由にものごとを語ってもらおうとした。とりわけ私の思いも寄らなかったことについて語ってもらうことを望んだ」 (*ibid.* 60=74-75)。

細部を見逃さない、思いこみによる見落としをできるだけ減らす、単純化を避け、自分の認識を複雑化しておく。こういった姿勢がベッカーの技法からうかがえるだろう。

ものごとを単純化して理解しないための方法としてベッカーは師匠である E. ヒューズがよく小説を読んでいたと語る。「ヒューズたちはフィクションを熱心に読んでいた。フィクションの創作者が、われわれにはおよびもつかない優れた洞察をもっているからではない。フィクションの創作者はあるものごとをととても注意深く記述するので、われわれはそこから自分たちの理論の否定的事例を抽出できるからだ。社会学者や経験的研究の数よりも小説や小説家の数の方がずっと多いのだから、それらはわれわれ以上に多様な状況をカバーしており、したがってそれらを読まなければ知ることのなかった可能性を記述しているはずなのだ」 (*ibid.* 208=254)。

自分の理論を否定し反証する事例をわざわざ探すことは、性急な結論に飛びつきたくなる気持ちを抑え、ゆっくり時間をかけて考えることを必要とする。ベッカーもスロー社会学を暗黙のうちに提唱していると考えられるだろう。

4. 社会学的思考とはスロー・シンキングである

ライールやベッカーのようにスローであろうと意識する社会学者がいる。イギリスの社会学者 L. バック (2007=2014) である。バックは「スロー社会学」のようなことばをどこにも使っていないが、社会学的思考とはスロー・シンキングであると述べているように思う。

もともと人類学者であったバックは、聴き取り調査を中心とした手法で社会学的研究をおこなってきた。「グローバル社会の広がりや複雑性を完全に理解することは私たちにとって難しいかもしれないが、それでも社会学者は、ともすれば通り過ぎ無視されてしまったかもしれないさまざまな断片や声、物語に関心を向けることができるはずだ。社会学の仕事とは、そのような声を受け入れ、それとていねいに向きあっていくことなのだ。まさにこうした関心を向けるからこそ社会学者は、耳を傾けられることのない人びとの声を聴き、過去と現在の出来事の意味に対する支配的な主張に異議をとなえることができる」(Back, 2007: 1=2014: 19 傍点引用者)。

また彼の著書に再三登場するのがC.W.ミルズであることから推測できるように、聴き取りによって得られた個人的な語りを公的・社会的な問題と関連させて理解しようとする。「ミルズにとって社会学の役割とはつぎのことなのだ。私たちのもっとも身近で個人的な関心事を構成する、より大きな社会的諸力を明らかにすること、すなわち、人びとの人生のなかの「個人的な問題」を、歴史や社会のはらむ「公的な問題」へと描き直すことである」(ibid. 10=32)。

バックの著書から感じとられるのは、ミルズのいう「社会学的想像力」を徹底的に働かせようとする姿勢である。「ミルズはまたつぎの点もはっきり認識していた。社会学的な想像力とは、議論に影響をおよぼすこと、また彼のいう多様な「大衆的読者」のために独創的に書くことに、意識的に関わっていくことでもある、という点である。ミルズは、社会学的な研究が外部の人びとにはわからないような専門的な言語をつぎつぎと生みだす危険を予期していた。……このようなことを避けるために、私たちは社会学をより文学的にしていくことを心がけねばならない。……私は文学的な社会学を提唱したいと思う。それは社会的な生を殺してしまうことなく記録し、理解することを目指すものだ」(ibid. 164=271-272)。

このように主張するバックは、それゆえ、文学作品を社会学的認識の導きとして用いる。たとえばジョン・マクレガーという作家の小説『奇跡も語る者がいなければ』から、以下のような部分を引用している。小説の登場人物である、手に大やけどを負っている父親が娘に語りかけるシーンである。「わが娘よ、と彼はいう。……わが娘よ、お前はいつもその両の目でものをみて、その両の耳でものを聞かなければならないよ。世界はとても広くて、注意していなければ気づかないことがたくさんあるんだ。奇跡はいつも、私たちの目の前にあるんだ。でも私たちの目は太陽にかかる雲のようなもの。もし私たちが奇跡をありのままにみなければ、人生はとても色あせたつまらないものになってしまうんだよ。／奇跡も語る者がいなければ、どうしてそれが奇跡と呼ばれるだろうか？」(ibid. 9=30)。

この小説の引用につづけてバックはいう。「社会学の責務と課題もまた同じような精神のもとにあると私は主張したい。本書で取り組むすべてのテーマに通じる一つの重要なポイントは、モノや場所に隠された生に関心を向けるということである——形式にこだわる権力や忘れっぽい慣習的知識によって隠され消し去られてしまった生に注意を向けるということである。社会学は

……時流（grain）に逆らって世界を読み、中心的な物語の一部でありながらもそこからはじきだされた物語を探し求める実践なのだ」（*ibid.* 9=30 傍点引用者）。

ここまでのバックの引用で傍点を付しておいて部分を振り返っておこう。「ともすれば通り過ぎ無視されてしまったかもしれないさまざまな断片や声、物語に関心を向ける」「そのような声を受け入れ、それとていねいに向きあっていく」「モノや場所に隠された生に関心を向ける」「形式にこだわる権力や忘れっぽい慣習の知識によって隠され消し去られてしまった生に注意を向ける」。このようなことを実現するには、時間をかけてゆっくりと読んだり考えたりすることが必要ではないか。

マクレガーの小説の「世界はとても広くて、注意していなければ気づかないことがたくさんあるんだ。奇跡はいつも、私たちの目の前にあるんだ。でも私たちの目は太陽にかかる雲のようなもの。もし私たちが奇跡をありのままに見なければ、人生はとても色あせたつまらないものになってしまうんだよ」という助言にしたがうならば、つまり、いつもわれわれの目のまえにあるのに見落とされてしまい気づかれない「奇跡」に気づくには、スピードを緩め、スローな姿勢が大切にならないだろうか。

バックは社会学的な思考の特徴として、そのゆっくしさ（slowness）を指摘する。

社会問題をめぐる公的な議論は決まり文句や「ファストフード・シンキング（fast food thinking）」で埋め尽くされているが、それとは対照的に、社会学的な判断に関するひとつの貴重なことがらとは、ペースがゆっくりであること（slowness of pace）である。以前はそれは弱さだと感じていた。その時々々の公的な問題に介入するためには、すばやく考えること、そしてジャーナリズムやメディアを通じて幅広く調査結果を伝えていくことが必要だと考えていた。しかし今では逆の見解をもっている。……私たち研究者は執筆を急かされ、その結果、調査に本腰を入れることが難しくなっている。……私は象牙の塔に引き返そうと主張しているのではない。そうではなく、注意深く耳を傾け、そしてその声を社会的に判断するには、時間がかかるということなのだ（*ibid.* 19=49-50 傍点引用者）。

バックは「ファストフード・シンキング」についてくわしく説明しているわけではないので、こちらで推測するしかない。現象や問題に関するなんらかの情報を知るやいなや、その現象・問題の原因や理由を推測し、意味を解釈し、影響・帰結を予見し、是非を判断するような思考プロセス、つまり現象・問題についてなんらかの報告・報道があればすぐに「答え」を導きだすような思考パターンが「ファストフード・シンキング」なのだろう。

テレビでよくみかける「コメンテーター」と呼ばれる人たちの思考パターンがその典型である。彼らはそれが仕事なのだから、「ファストフード・シンキングだ」と責めても仕方ない。短時間で無難な「答え」やコメントを述べなければならないので、その「答え」やコメントはパ

ターン化し、どこかで聞いたことのあるような、似たようなものになってしまうのも不思議ではない。スポンサーや視聴者からクレームがこないようなコメントさえできれば「コメンテーター」にとって問題はない。

そもそもその現象・問題について、ほんとうのところどうなっているのか等を知ろうとする動機も関心もあまりないように見受けられる。つぎつぎと報道されるニュース、事件、事故、話題について、無難なことをひとことというのが期待されている仕事なのだから、パターン化した決まり文句を述べるのが経済的・効率的である。だから「ファストフード・シンキング」なのである。

「ファストフード・シンキング」と対比すれば、社会学的思考はいわば「スローフード・シンキング（以下、スロー・シンキング）」である。とはいえ、「ファストフード・シンキング」と「スロー・シンキング」は程度の差にすぎない。明確に境界線が引けるわけではない。また、前節の、ライールによるハビトゥス概念批判にみられたように、社会学者であっても「ファストフード・シンキング」に陥ることはありうる。

以下、社会学的思考の重要な特徴としてのスロー・シンキングを論じていく。ただし、スロー・シンキングは社会学の専有物ではない。社会学にかぎらず、現象・問題がどういうプロセスで起きたのかをくわしく知りたいという動機があったり、現象・問題について一般的にいわれていることがほんとうにそうなのだろうかという疑問を感じたりする場合に、スロー・シンキングは実践されていることだろう。言い換えると、「その現象・問題についてわかりたいが、よくわかっていない」という素朴な思いによってスロー・シンキングは発動する。逆に、テレビの「ファストフード・シンキング」からは「私はよく知っている、全部知っている、すぐに理解できる、正しい答えがすぐだせる」といった全能感が読みとれるように思う。

以下、節を代えて、私なりにスロー・シンキングの動機や意味について考えたい。

5. スロー・シンキングの動機とねらい

スロー・シンキングは文字どおりゆっくり考えることである。ゆっくり考えるには、ゆっくりものをみたり、ゆっくり話を聞いたり読んだりすることも必要である。急いでいるときには視野に入らなかったことも考慮に入れる。そのためにはたとえば同じ映像をくり返しみたり、同じ資料を何度も読んだり、同じ人から何度も話を聴いたりすることもしないといけない。急いで結論や答えをだすことも避ける。結論や答えらしきものが得られても、それには「ひとまずの」とか「差しあたり」とかいったことばが頭についている。その根底には「じつはちゃんとわかっていないのではないか」という自分への不信がある。

「受験体制」的ものの考え方

私は受験勉強の習慣からいろんな影響を受けてきている。それも、あまりよいとは思えない影

響を受けてきた気がする。なかでも、ものの考え方が「受験体制」的なのがいやである。

ものの考え方が「受験体制」的とは、まず、「努力した分は結果に表れる」とか「継続は力なり」とか、「現在している努力の質と量に応じて、よい成果や幸福がやってくる」というような考え方だ。だから、未来になにかいいことが起きてほしいなら、それが起きるようなことに現在は努力しなければならない。たとえば、大学卒業後にいい収入がほしいなら、いい収入が得られる会社に入るための努力を現在は継続しなければならない、というようなよくある考え方である。

この考え方が私にとっていやなのは、現在を楽しむことができなくなりがちだからである。社会が設定した「よい未来」のために現在を犠牲にして、未来の楽しみのために現在はがまんする。そのこと自体は意味がある場合もあるから、一概に否定するつもりはない。しかし、習慣化すると、非常に禁欲的になってしまい、現在を楽しむと罪悪感をもってしまう。未来に到達すべき目標・目的に役立ちそうにないことをすると罪悪感を覚える。ムダなことをしてしまったと後悔する。現在こうして生きていることを実感せずに、まるで「ほんとうに生きるのは未来において」であるかのように錯覚する。

現在に安住できず、なにかよくわからないものに追い立てられているかのように、つねに焦っている。「遊びをせんとや生まれけむ」という境地になりたいと頭で思っている、こころのどこかで「いま遊んでいたら、将来は……」などと声がしてしまう。

さらに、ものごとをできるだけ効率的に、プロセス抜きで早く済ませたい、というふうに見えるがちになってしまう。現在を犠牲にして努力しているから、どうしても無理しがちになる。嫌々やることになる。だから「さっさと」済ませたい。一秒でも早く答えがほしい、答えにたどり着きたいと考えてしまう。禁欲的ではあるが、忍耐力はない。要するに前節に登場した「ファストフード・シンキング」の思考パターンなのである。

そして、唯一の答えというものがある、と思いこむ。答えがないと思って答えを求める人などいないだろう。そう思ってきたが、それは思いこみにすぎず、答えはないと思っているが答えを求めて考えつづけるという人もいと最近思えるようになってきた。

答えがあるという思いこみをもつだけでなく、たとえばテストでだされた問題に答えられたとき、なにかについて自分はちゃんと知っている気になってしまう。わかった気になってしまう。先生もそういうふうには評価してくれる。「よく知ってるね。よくわかってるね」と笑顔でほめてくれる。そうして、自分は知っているんだ、わかっているんだ、と思いこむことになる。

以前にも書いたことがあるが（森、2015）、「じつは自分はなにか知っているわけでもわかっていないわけでもないのではないか」と思うようになってきてしまった。ソクラテスを気取るつもりはない。そもそも、なにかを知っているとはどういうことなのか。わかっているとはどういうことなのか。それがよくわからなくなってきた、ということでもある。そういう実感があるというだけのことである。

答えがないとわかっているにもかかわらず答えを求めて考えつづける。一見不合理に思えるそういう姿勢の方がおもしろいと感じるようになってきた。より正確には、答えがあるのかないのかすらよくわからないけれども、たぶんないのだろうなと思いながらも、答えを求めて考えつづける、いろいろやってみる、試してみるという姿勢だ。目的地もはっきりせず、どこにたどり着くかわからないけど歩きつづけるという感じといえるかもしれない。

スロー・シンキングを唱える本稿は、効率的であることや合理的であることを全面的に否定しているわけではない。仕事場にはなるべく効率よく通いたいし通おうともしている。そのために計算もする。大学の教員が仕事だから、学生の成績もつけないといけない。採点に時間をかけたくないし、成績評価に悩む時間を減らしたいので、講義科目であれば記号選択問題を課し、正解の数を数えてそれを数値化し効率的に成績をだす。けれども、授業では、ゆっくりひとつのことを考えるようにしている。

授業でスロー・シンキング

たとえば授業中にある映像を学生たちにみせる。映像ではいろんな場面でいろんな人が登場しているいろんなことをしている。ある場面である登場人物が「オレはいまこの場にいる人間たちを支配している！」と叫ぶ。映像をみせ終わったあと、この場面のこの発言を取りあげる。学生たちに問いかける。「支配するって、どういうこと？このシーンを例にしたとすると、なにがどうなったら“支配”できていることになるの？」などと問いかける。学生たちは挙手して自分の考えを話してくれる。発言を聞いて細部を見落としているなと思うときは、同じシーンを2、3回みせる。学生たちの発言を引きあいにしながら、ときには学生の発言に対してさらに問いかけをおこなったりしながら、支配するとはどういうことなのか、ゆっくり学生たちと考えるようにしている。

こちらが予想もしなかった発言が学生から飛びでてくる。映像の細部について、私が気づけなかったことがらを指摘してくれることもある。何度も同じ映像をみたはずなのにどうしても見落としている部分はたくさんある。そういった発言や指摘に刺激されて、授業の準備段階では思い浮かばなかった考えが頭に浮かんでくる。その考えをもとに話をするから計画どおりに授業は進まない。余談へと話が逸れるということではない。話のテーマは変わらないのだけれど、準備段階では「こう考えられるのではないか」という線で説明しようと計画していたことが、学生の発言や指摘によって「この線は違うかも」と感じられ、「こう考え直した方がもっといい解釈になるのではないか」と思えてきて、考え直した解釈で授業を進めることになる。それで計画通りに話が進まなくなるのである。

しかも、わかりきっていると思っていたこと、知っていたつもりになっていたことが、あくまで「つもり」であり思いこみにすぎなかったこと、じつはそんなによくわかっていなかったことが浮き彫りになってくる。「支配」などということばはふだん意味がわかって使っているつもり

だった。けれどもあらためてゆっくり考えてみると、支配が成り立つためにはいろいろな条件が必要なことがみえてくる。そういった条件はそう簡単にはそろわないことも想像できるようになってくる。すると、今まで「だれかがだれかを支配している」などとなんとなくわかったつもりでことばにしていたことが、ほんとにそういえるのかわからなくなってくる。「支配」ということばが気安く使えなくなってきた。

スロー・シンキングでみえてくること／みえにくくなること

こういうふうになると、すべてを曖昧にしようとしているかのように捉えられるかもしれない。スロー・シンキングは曖昧化が目的ではない。ただ、この世界に存在するものや起きているものごとはあまりにも複雑であり、そう簡単には明確に分類したり線引きしたりできないはずであることを思い起こそうとはしている。前節でも論じたように、複雑なものをあまりに単純化したりきれいに分類したりしすぎているのではないかという疑問。ことばを使って人工的につくった分類カテゴリーをいつの間にか世界のあり方そのものであるかのように、当の分類カテゴリーをつくった人間自身が勘違いしているのではないかという問題意識。こういった疑問や問題意識がスロー・シンキングを支えている。

「じっくりゆっくり捉え返してみると、わかっていたつもりだったことがじつはよくわからなくなるね」ということになりがちだから、手っとり早く試験にでることがらを教えてくれたら、つまり「正解」さえ教えてくれたらいいと考える「受験体制」的な学生にはつまらない授業だろう。とはいえ、なんでもかんでも「よく考えたら、よくわからなくなるね」ばかりで話が終わるわけでもない。みえてくることもある。「支配などできるかどうかわからないのに、あるいは支配は不可能とも思えるのに、支配は可能と信じて、取り憑かれたようにそれを追求する人間もいる」ということはみえてくる。答えがあると信じて、答えさえ知れば人生いろいろうまくいく、と考えている人、「受験体制」的ものの考え方の人も似たようなものであることがみえてくる。

このようにスロー・シンキングによってみえてくることがある。逆に、みえなくなること、わかりにくくなるものもある。動きの速いもの、たとえば蝶々はどのように羽を動かして空中を飛んでいるかを知るためには、スロー・モーションの映像が役立つ。けれども動きの遅いもの、たとえば花はどのようにして咲くのかを知るためには、早送りの映像の方がよくわかる。変化があまりにもゆっくりだから、早送りにして初めてこんなふうに花は咲くのだとわかる。

それゆえスロー・シンキングが万能だなどとは思わない。早送り映像のようなものも無視せず、必要なら考慮に入れる。スロー・シンキングの方が「受験体制」的思考方式より余裕をもとうと心懸ける。「受験体制」的思考方式はスロー・シンキングを取り入れないが、スロー・シンキングは効率的なものや早送り映像的なものも排除せず、考えるための材料にする。

スロー・シンキングの進め方

本稿につづく「スロー社会学の試み(2)」ではスロー・シンキングを実践していく。

スロー・シンキングに決まった方法はない。具体的な素材を対象にして、できるだけ急がずゆっくり考えてみるだけのことである。「スロー社会学の試み(2)」では、国土交通省が発表した「多様性社会シナリオ」という素材を対象にスロー・シンキングしていく。

素材のどこに目をつけるか。それは「ん？」と思ったり「おかしいな」と感じたりする部分である。違和感を覚える部分に目をつけるということである（森、2018）。

「それでいいのか」といわれそうだ。「そんな恣意的な」とか「いい加減だ」とかともいわれるだろう。「なにに違和感をもつかなんて人によって違うじゃないか。関心や価値観は人それぞれなのだから、共通の論点が設定できないし、些末な問題から重要な問題まで玉石混淆状態になるじゃないか！」と叱りつける人もできそう。

そういうふうに主張する人は「一回考えて、大事なことはその一回で全部解決する」といった考え方に陥っているのだろう。これも「受験体制」的思考方式である。無味乾燥な参考書の内容を覚えなさいといけなから、苦痛を減らすためにも、できれば一回読んだだけで全部わかったり覚えたりできることが理想となる。読書の場合でいえば、「一通り一回読んで、すべてを理解できる（または、理解すべき）」といった考え方だ。スロー・リーディングを提唱する人たちがすでにいろんなところで何度も指摘しているが、同じ本でも一回目に読んだときと二回目、三回目に読んだときでは印象が違うし、前回には気づかなかったことに気づくことがある。そのときどきの体調や問題関心のあり方、気分そのほかいろんな要因が絡まって、みえているのにみえていないことがら、読んでいないのに読んでいないことがらでできてしまう。だからくり返し読むことに意味がある。「一回読んだから、もうそれでわかった」ことにしたがる人は、そもそもその本が読みたいわけではなく、読んでないといけな事情があって読んだだけなのだろう。

スロー・シンキングも同じであって、同じことばやものごとについてくり返し考えればいい。二回目は一回目のときとは問題関心も変化しているだろうから、一回目には違和感をもたなかったり気にも止めなかったりしたことがらに目をつけてスロー・シンキングするかもしれない。さらに一回目に考えて以降もいろんなことを考えたり読んだりしているから、そこで得られた知識や情報、考えたことをふまえて二回目は考えがさらに深まるかもしれない。

しかも、スロー・シンキングするのは私だけではない。私ひとりであることがらについて考えるべきことすべてを考え尽くす必要などないだろうし、そもそも不可能である。私が違和感を覚えなかったことがらについては、問題関心も知識の質も量も私とは異なる別の人が違和感をもつ可能性もある。その意味でスロー・シンキングは民主的でもある。

ある一冊の本を読めば、あるテーマについて考えるべき問題やその解答を知ることができるはずだという期待も「受験体制」的である。受験問題にでることがらはすべて網羅していることになっている教科書や参考書に慣れすぎたせいだろう。そういう期待をもつ人にとっては教科書や

参考書が本のモデルとなっている。しかし教科書や参考書の方が特殊な書籍だ。

「受験体制」マインドや「ファストフード・シンキング」は基本的にケチなのだ。時間もお金もかけたくない。「これ一冊で十分」と銘打たれた一冊の本にだけお金を払う。それ一冊だけ読んで、そのテーマについてはわかったことにしたい。できれば時間もかからないのがよい。だから出版する側も「受験体制」マインドの読者の期待に答えて「10分でわかる」といったタイトルをつけて売る。とはいえそういった本を全面的には否定することもできないのだろう。あることからの内容を大掴みしたいときには「10分でわかる」式のものが役立つこともありそうだからだ。

スロー・シンキングがみえにくい理由

だいたいの研究者は本稿がいうスロー・シンキングをしている。ただしスロー・シンキングしているプロセスや現場は学生にはみえにくい。みえるのは活字になった文献だけだ。それで若い人たちは勘違いしがちである。執筆者は最初からこういう答えや仮説をもっていたのだという勘違いである。完成品が執筆者の頭のなかに最初からあるかのように勘違いするのである。「受験体制」的思考方式にはまっていた私はこの勘違いをしていた。

次節でミルズの「ファイル」に言及しながら論じるが、まともな研究者・執筆者は、文献を執筆するまえに、いろんな可能性をああこうだ、ああでもないこうでもない、とじっくり考えている。似たようなテーマをもつ研究者のまえで自分の考えを披露しそれに対する批判や疑問をもらってじっくり考えるし、自問自答しながらゆっくり考える。だが考えたこと、調べたことのすべてを文献に書くわけではない。全部書くと論旨が不明確になる。読者に話がみえなくなり、読みにくくなる。論文の場合は字数制限もきびしいので、一番いいことを決めて、そのいいことを読者に理解してもらうのに役立つことしか本文には書かない。どんなに時間をかけて考えたり調べたり分析したりしたことでも、つまりスロー・シンキングした結果も、その文献で一番いいことを伝えるのに役立たないと著者が判断したものは、原稿からすべて削除せざるをえない。こうして完成品だけを目にする読者には、スロー・シンキングのプロセスはみえなくなる。まるで最初から答えが、「正解」が、執筆者の頭のなかにあったかのように勘違いしてしまう。

執筆者にはたしかにある種の思いこみや前提があって、それにもとづいて読んだり書いたりしている。いわゆる「理論負荷性」である。「理論家」を自称する人にこの傾向が強い。いままでなかった現象や事実が観察されると、その思いこみ（「理論」）でもって問題の現象や事実が発生した理由や原因を明快に説明する。だからどんなに新しい現象であっても、その説明はいつも同じようなものになりがちである。読む側・聞く側も「たぶん、この人はこう主張するだろうな」と予測でき、「ああ、やっぱりか」と予測どおりだったりする。そうなると、「理論」というより「イデオロギー」とか「偏見」「固定観念」「決めつけ」と呼ぶ方が適切に思えてくる。

けれども、まともな研究者は、新しい知識や情報、経験、考えなどをもとにスロー・シンキングしていると私は思う。そういう研究者は、自分の前提や仮説が間違ふ可能性（いわゆる「可謬性」）も意識している。間違ふ可能性を意識するからこそ、スロー・シンキングする。しかしそのプロセスがみえにくいのはすでに説明したとおりだ。

考えること自体が目的というわけではない

スロー・シンキングでは、だから自分の思いこみを思いこみとして自覚する必要もある。そして思いこみを修正しないといけなと思えば修正する。捨てないといけな場合には、なるべくあっさり捨てる。思いこみにしがみつかないことも大切だろう。思いこみを完全に捨て去ることは不可能なので、よりましと思える思いこみに変えると表現した方がいいだろうか。思いこみにしがみついていることを「ブレない」として賞賛する向きもあるが、そういう人からするとスロー・シンキングは「ブレまくり」に見えるかもしれない。でもそれはそうみえるだけのことで、自分なりに真摯に答えを追求する点には「ブレ」はない。

ただし、最終的な答えはないとも考えている。ずっとスロー・シンキングをつづけていくだけである。とはいえ考えること自体を目的としているわけではない。考えることが楽しいから考えるということではない。答えをだすことを目的に考える。ただしたぶん最終的な答えはでない。

だから、ビジネスの現場や大学の授業等でなにか結論やレポートを締め切りまでにださないといけない場合などには不適切に思えるかもしれない。けれども、そんなときでも、スロー・シンキングしている最中の途中経過を差しあたりの答えとして自分の考えを主張すればいい。そもそもスロー・シンキングからすれば、すべての人のすべての考えが途中経過であり、差しあたりのものである。

6. 研究のプロセスをみせる

社会学・イン・ザ・メイキング

本稿および本稿につづく「スロー社会学の試み(2)」のねらいのひとつは、考えるプロセスをみせるところにある。映画のメイキング・ビデオに似ているので、「社会学イン・ザ・メイキング」という感じに近い。

前節で紹介したデノーラもバックも、スロー・シンキングの意義については主張しているが、ではじっさいにどんなふうにもスロー・シンキングするのかについては読者に提示していない。それを提示しているのはミルズ（2000（1959）=1965）である。

『社会学的想像力』には「知的職人論（On Intellectual Craftsmanship）」という付録がある。研究者を目指す初心者想定したアドバイスである。「経験の豊富な思考者が自分たちのじっさいの作業の仕方について情報を交換するような会話によって、はじめて初歩の研究者にも方法と

か理論というものの有効な意味が伝達されるのである。私は自分の職能（craft）をどのように実行しているか、これをややくわしく報告することも無益ではあるまい」（Mills, 2000（1959）：195=1965：256）と述べ、ミルズは自分の研究手法について開示している。彼の手法の中心を占めるのは「ファイル（file）」である。ミルズがファイルに記入するのは、個人的経験や専門的活動、進行中の研究や研究計画、さまざまなアイデア、路上で耳にした会話の断片、夢の内容、書誌情報、文献の抜粋、などである。また、ファイルに書きこんだことがらをマスターファイルへと編集する作業、文献の読書ノートをつける習慣についても助言している。

ここで注目したいのは、そのファイルの一部をミルズが公開していることである。エリート研究というプロジェクトを着想したミルズは、モスカ、シュンペーター、ヴェブレン、マルクス、ラスウェル、ミヘルス、ヴェーバー、パレートたちの業績についてのファイルを作成する。そのうちの、モスカに関する部分の一部を開示しているのである（*ibid.* 203-204=266-268）。また、エリート研究のための経験的研究の計画に関するファイルも公開している（*ibid.* 207-210=271-276）。これを読むと、ミルズがどのような準備をしていたのか、その一端がうかがえる。人によっては「準備段階というものがあるんだ！」と驚くことがあるかもしれない。

私はミルズにならって、ミルズのいうファイルではないが、研究の初期段階あるいは授業の準備段階であれこれと考えたプロセスを再現したいと考えている。これが「スロー社会学(2)」の中心的作業となる。

くり返しになるが、読者が読むのはたいてい作者のアウトプットだけである。読者、とくに若い読者は、アウトプットに至るプロセスに接する機会がない。ああだこうだと一人で考えたり、だれかと議論したりしながらアウトプットに至るプロセスを知らない若い人は、研究者や学者というのは「パッとみて、パッとわかる」存在であるかのように誤解している節がある。私自身、ある時期までそのように誤解していた。

この誤解を解くためにも、考えるプロセスをみせる。そのプロセスはたいていスロー・シンキングなのではないかと思う。意味があるのかどうかわからない「寄り道」をしながら目的地らしいところを目指したり、目的地そのものを考え直したりするプロセスをみせる。考えたり調べたりしたことが結局ムダになることもありうる。ただしムダになるかどうかは考えている時点ではわからない。おそらく死ぬまでわからない。いずれにしても「一本の論文を書くとき、一回の授業を準備するとき、最初の段階ではこんなふうを考えをうろうろさせながら準備するんだ」ということを伝える努力と工夫はしたい。

「スーパーマン／スーパーウーマン」ではない姿をみせようとする人類学的調査報告の試み

研究や思考のプロセスをみせるということについて本稿と問題意識を共有していそうな試みがある。李仁子・金谷美和・佐藤知久編『はじまりとしてのフィールドワーク 自分がひらく、世界がかわる』である。

人類学者である李らは、大学で人類学を教えはじめていろんなことに気づいていく。そのひとつが、人類学の手法であるフィールドワークが「きちんと教えられていないという感触」である。フィールドワークの方法に関する著作はたくさん出版されているにもかかわらず、彼らはそういう感触をもっている。

ひとことで言えばそれは、教科書の多くがフィールドワークという方法についての「メタ」議論ばかりだからだ。そこではフィールドワークがどんなものであるべきかが論じられるが、実際のフィールドワークがどんなものであるのかは詳しく述べられていない。一年以上の長期にわたって特定のフィールドに滞在し、現地の人びとと同じものを食べ、飲み、慣習に従い、現地のことばを用いて精力的にデータを収集し、倫理的な問題にもきちんと目配りしつつ、集めた膨大なデータを民族誌にまとめるスーパーマン／スーパーウーマン。フィールドワーカーはそう理想化される。だが調査がそんなふうにはうまくいかないこと、フィールドワーカーが鉄人でも超人でもなくタダの人であることは、まじめにフィールドワークをすればすぐにわかることである。……フィールドワークの途中にある失敗や迷いは、フィールドワークの成功という主題の枠内で語られ、そこにおさまってしまう。結果として、書かれた論文や著書の背後にあるもの、水面下でバタバタしている足、調査地での失敗やトラブルといったフィールドワークの実情自体が問題にされることはほとんどない。こうしてフィールドワークの実際はブラックボックス化される。……それは人類学の生産現場自体がブラックボックス化されているのとはほぼ同じことだ（李ら、2008：3 傍点は原著者）。

しかも、授業や論文では語られないフィールドワーカーたちの失敗・トラブル・迷いといった経験は、飲み会などのインフォーマルな場で世代間を通じて伝えられてもきた。つまり授業・著作などのフォーマルな場とインフォーマルな場がはっきりわけられ、「実情」は後者の場でのみ語られるべきものと位置づけられてきたわけである。こういう二項対立を問い直そうというのが李らの試みである。だから、この本ではフィールドワーカーたちがフィールドにおいておとした失敗、病気の経験なども報告される。

人類学的な思考なるものは、フィールドにおけるさまざまに複雑で混乱した状況における経験と、論文に書かれる整理され精密に分析された議論とのあいだにこそ生まれる……。人類学的思考のセンスとでも呼ぶべき感覚は、フィールドワークの結果として練りあげられた認識だけでなく、むしろそうした認識に至るフィールドワーカーの軌跡によってこそ鍛えられるのである。……フィールドワークが人類学者にとっての通過儀礼であるというのは、複雑すぎる現実を前にそれを認識へと至らしめるためのプロセスにおいて、どれだけ認識が崩れ・再生し、そのためにどれだけ熟考したかという意味においてである（同：5-6 傍点は引用者）。

くり返し「認識が崩れ・再生し」、時間をかけて「熟考」しようとするフィールドワーカーはスロー・シンキングの実践者といえよう¹。

最後に文体の問題として李らはこう述べる。「本書で私たちが論文調ではない文体を目指したのは、著者自身の立場が変容していく様子、個別的なエピソードと学問的知見の双方を書きうるような文体を必要としたからである」(同：8)。

スロー・シンキングの過程をみせることを目的とする本稿および「スロー社会学の試み(2)」も、通常の学術書とは文体が異なる。思いつきや違和感、ひっかかりがでてくるたびに、さっきまで考えていたことを保留し「寄り道」するような書き方になる。それゆえ、結論に向かって淀みなく論理的に話が進んでいかない。うろうろする。文体も論文調を極力避けたいと思っている。

7. スロー・シンキングとスロー・リーディング

先述のとおり、「スロー社会学の試み(2)」では、国交省の「多様性社会シナリオ」という文書を使ってスロー・シンキングを実践するが、それは「多様性社会シナリオ」をスロー・リーディングするということでもある。スロー・シンキングとスロー・リーディングは切り離すことができない。

橋本武(2014)は、スロー・リーディングのポイントとして、①寄り道する、②追体験する、③徹底的に調べる、④自分で考える、の4つをあげている。次稿では、このなかでもとくに①と④を実践しようとしてきた。研究すること自体はそもそも「寄り道」の集合体のようなものだから研究者にはあたりまえかもしれない。「自分で考える」のも同じくあたりまえかもしれないが、意外にできていないような気がする。「とにかく自分の頭で考えることが重要ですから、みんなの考えと合致しているかどうかなど、気にすることはない」(橋本、2014：.32)というなんの変哲もないことばを支えにスロー・シンキングしていきたいと思う。

山村修(2011)は、速読派・多読派の主張への疑問を提起しつつ、ゆっくり読むことの意義を語りかける。速読派・多読派は私という「受験体制」的ものの考え方と共通点も多いのだが、もっとも考えさせられたのは、読書と時間の問題であった。「読みかたは生きかたである」(山村、2011：125)「読書の時間について考えるということは、同時に、読書をふくむ暮らしのすべての時間について考えるということである」(前掲書153)と考える山村修は「暮らしの時間を、自分の手でめぐらせるのか、少なくともめぐらせようとするのか。あるいは、めぐる時間と競争しながら生きるのか。あるいは、時間のことなど意に介さないか」と問いかける。「めぐる時間と競争しながら生きる」ことに追い立てられているのが「受験体制」的思考方式の人だ。「暮らしの時間を、自分の手でめぐらせるのか、少なくともめぐらせようとするのか」と自分に問うたことのなかった私には、スロー・シンキングの実践を通じて暮らしの時間をぜひ自分の手ですこ

しでもめぐらせたい。

スロー社会学を提唱したデノーラはTh.W.アドルノをスロー社会学の人として引き合いにだしているが、そのアドルノ（1963=2006）はヘーゲルの読み方についてこんなことを述べている（傍点はすべて引用者）。「ただ読者が問題に慣れるためばかりでなく、客観的に見ても、ヘーゲルは何度も読むことが望ましい」（Adorno, 1963=2006：177）。

「ヘーゲルは、実は読者に二重の操作を期待しているのである。……読者はまず、彼の言葉と一緒に進み、流れに身をゆだねなければならない。……しかし他方で、読者は一種の知的なスローモーション操作を習得しなければならない。そして不明瞭な箇所ではテンポを遅らせて、この箇所がパッと消えずに、動くものとしてしっかり眼に入るように訓練しなければならない」（前掲書234）。

「ヘーゲルを読むために必要なこうした心構えも、根気よく細部にこだわる態度によって補ってやらないと、どうしても散漫になってしまう。……細部にこだわるだけではどうしても駄目だとなつてはじめて、読者はダイナミックに距離をとって行動し、細部にこだわる態度を修正してもいいのである」（前掲書241）。

傍点部のようなアドバイスをするアドルノ自身はやはりスロー・リーディングの人であり、スロー・シンキングを実践してきた人なのだろう。

J.デリダ

J.デリダもスロー・リーディングの人なのではないか。たとえば1994年10月にアメリカのある大学で開催された円卓会議でデリダはつぎのような発言をしている。「わたしはずっと、プラトンやアリストテレスを読み、理解しようと試みてきましたし、彼らに多くのテキストを捧げてきました。……こういったわけで、われわれは彼らを、繰り返し繰り返し読まねばならないと思いますし、わたしがどれほど年をとっていても、わたしはプラトンとアリストテレスを読む入り口に立っていると感じています。わたしは彼らを愛していますし、何度も繰り返し出発し直さなければならないと思っています」（Derrida, 1997：9=2004：12 傍点引用者）。

この円卓会議の主催者の一人でもあるJ.D.カプートは、デリダのつぎのような発言も紹介している。「わたしが絶対的に非難する態度……がただひとつあるとすれば、それは、本質的に果てしなく問うことの可能性を、つまり効果的に、したがって変形しながら問うことの可能性を、直接的にせよ間接的にせよ封鎖する態度です」（*ibid.* 56=82-83 傍点原著者）。

プラトンやアリストテレスを読むときに「何度も繰り返し出発し直さなければならない」という姿勢で臨むデリダ。「本質的に果てしなく問う可能性……を封鎖しようとする態度」を「絶対的に非難する」デリダ。こういう人がいたということが、スロー・リーディングやスロー・シンキングを実践する私にはとてもうれしく感じられる。

さらにカプートはデリダの読み方をつぎのようなたとえ話で解釈する。「脱構築的読解という

考え方は、高速道路だけを通り、小さな脇道をたどったり標識のないエリアに敢えて立ち入ったりしない……より再生産的で古典的な読解を前提としているということである。古典的読解は、テキストの支配的傾向とでもいったものに、つまり番号つき出口のあるスムーズな超高速道路に沿って進む。こうした読解の後ではじめて、あるいはこうした読解を通じて、または、一番良いのは、そうした読解と並行して、脱構築的読解が、袋小路とアポリアを指摘し、そして事態をより難しいものにすることに着手するのである」(ibid. 76=109-110 傍点原著者)。

私の勝手な解釈では、「高速道路だけ」を通る「古典的読解」は「受験体制」的思考方式であり、速読派・多読派でもあり、けっして「寄り道」をしないような態度である。一方脱構築的読解は、「小さな脇道」や「標識のないエリア」にわざわざ立ち入り、「寄り道」する態度、つまりスロー・リーディングであり、スロー・シンキングなのではないだろうか。ただし、このように二項対立的に考えるのはあまり脱構築的ではない。

それはさておき、カプートはさらに脱構築についてこんなことも書いている。「『脱構築』は、テキストの、つまりテキストの字義性とテキスト性のきめ細かい読解であろうとしている。それはテキストを、ゆっくりと綿密細心に、真面目に読む。そして『哲学』とロゴス中心主義が包括しようとしてはいるが、いまだに動いている諸力を解放しようとするのである」(ibid. 83=122 傍点引用者)。

私はデリダについて研究する者でもないし、脱構築推進派でもない。そもそも脱構築のことをよくわかっていない。デリダや脱構築を手前味噌的にスロー・シンキングの味方につけているだけである。

また、断るまでもないだろうが、スロー・シンキングは脱構築的営みだというつもりもない。この世には「身体が強い」人がいるのと同じように、「頭が強い」人というものもあるようで、デリダはそういう人なのではないかと思っている。脱構築には「頭の体力」が必要ということでもある。「頭が強い」のと偏差値の高さや頭の回転の速さなどが関連するのかどうかよくわからないが、あまり関係なさそうな気はする。一方私はどちらかというと「頭が弱い」側に入りそうだから、「頭の体力」もそれほどなく、「頭が強い」人のように脱構築などできない。だから、私自身にとって意味があると思うこと、つまりスロー・シンキングを私なりに実践していきたいというにすぎない。

注

- 1 じつはH.ベッカーも自分のフィールドワークのプロセスをみせているところがある (Becker, 1998:151-157=2012:185-193)。また書くというプロセスが学生にはみえにくいこと、そのプロセスをみせることについても言及している。「意外かもしれないが、学生にとっては、書くというのを生身の人間がおこなう現実の活動として想像するのは至難の業である。……学生は、本というものを誰かの仕事が生み出した結果とは考えない。教員とより近い関係にあるはずの大学院生でさえ、人が現実書いているのを目にすることはまずないし、活字になるまでまだ間のある、作業途中の草稿や書きものを目にすることは

ほとんどない。書くことは彼らにとって神秘のヴェールに覆われている。そんなヴェールを取り去り、彼らがいま手にしている図書も、そもそもは彼らと同じ困難に苦しむ生身の人間によって生み出されたものであるとみせてやりたい。私はそう思う」(Becker, 2007:xiii = 2012:ix)。そうして彼自身の作業のプロセスを公開している (*ibid.* Chapter 5 = 第5章)。

引用・参考文献 (邦訳の訳語は原著に照らして適宜変更している場合がある。また表記についても、論文全体で統一するために、変更している場合がある。)

- Adorno, Theodor, W., 1963, *Drei Studien zu Hegel*, Suhrkamp Verlag (渡辺祐邦訳、2006『三つのヘーゲル研究』ちくま学芸文庫)
- Back, Les, 2007, *The Art of Listening*, Bloomsbury (有元健訳、2014『耳を傾ける技術』せりか書房)
- Becker, Howard S., 1998, *Tricks of the Trade : How to Think about your Research while you're doing it*, The University of Chicago Press (進藤雄三・宝月誠訳、2012『社会学の技法』恒星社厚生閣)
- , *Writing for Social Scientists : How to Start and Finish Your Thesis, Book, or Article*, The University of Chicago Press (小川芳範訳、2012『ベッカー先生の論文教室』慶應義塾大学出版会)
- Denora, Tia, 2014, *Making Sense of Reality : Culture and Perception in Everyday Life*, Sage
- Derrida, Jacques, 1997, *Deconstruction in a Nutshell : A Conversation with Jacques Derrida*, edit. By John D. Caputo, Fordham (高橋透・黒田晴之・衣笠正晃・胡屋武志訳、2004『デリダとの対話 脱構築入門』法政大学出版局)
- 橋本武、2014『灘高・伝説の国語授業 本物の思考力が身につくスローリーディング』宝島SUGOI文庫
- 李仁子・金谷美和・佐藤知久編、2008『はじまりとしてのフィールドワーク 自分がひらく、世界がかわる』昭和堂
- Lahire, Bernard, 1998, *L'Homme Pluriel : Les ressorts de l'action*, Armand Colin (鈴木智之訳、2013『複数的人間 行為のさまざまな原動力』法政大学出版局)
- Mills, Charles Wright, 2000 (1959), *The Sociological Imagination* (fortieth anniversary edition), Oxford University Press (鈴木広訳、1965『社会学的想像力』紀伊國屋書店、ただし邦訳は1st editionによる)
- 森真一、2015「社会学するとはどういうことか」『ソシオロジ』60巻2号、pp.115-121
- 、2018「違和感の社会学に向けて」『追手門学院大学社会学部紀要』12号、19-42
- 山村修、2011『増補 遅読のすすめ』ちくま文庫

